



「医心」スペシャルインタビュー

# 県医師会長、大いに語る

石川県医師会 会長 **小森 貴**

国の医療制度改革に伴い、医師不足や看護師不足、自由診療と保険診療を併用する「混合診療」の導入など、さまざまな問題点がクローズアップされてきている。そうした問題について、現場の開業医や勤務医はどのように受け止めているのか。日本医師会代議員で、県医師会長である小森貴氏に、フリーアナウンサーの上坂典子氏がインタビューした。

# 病んだ人に優しく、 国民や県民が「主役」の 医療をめざす。

| SPECIAL INTERVIEW |

## 10年以上のキャリアを 積んで会員になる

上坂●「医師会」というと、長いキャリアを積まれたお医者さまの組織というような印象があるんですが、どういう先生方で構成されているんでしょうか。

小森●基本的には、開業医や勤務医など医師の資格を持った人で、趣旨に賛同される人が会員になっています。石川県の医師はおよそ3000人といわれていますが、そのうち約1700人が県医師会の会員で、郡市区医師会にも属しています。医師は、だいたい二〇代の後半ぐらいから現場に出て、臨床研修を積んで、医学部卒業後10年ぐらいいしてから、社会の中での医療の意味に興味を持ち出すのが一般的です。医師会とか医療全般のことに少し目が行くようになるのはそれからでしょうから、そういうキャリアを経た人で、医師会の趣旨に賛同している人が会員と考えていただければいいんじゃないでしょうか。

上坂●普段の活動というと、どういうことをなさっているんですか？

小森●かなり多岐にわたっております。

全部はとも紹介しきれないので主だったものをあげますと、まず一番目に、いささか固い言葉ですが「医道の高揚」ということがあります。医療行為というのは、傷のない患者さんにメスを入れたり、劇薬かもしれない薬を処方したりというように、医師以外にはいけない行為を委ねられているので、極めて高い倫理観が求められることが最初に規定されています。二つ目は、学術の推進です。医師は科学者であり、科学に基づかない医療はありえないから、常日頃から学術の研鑽、推進に努めなさいということ。三番目が、社会における医療の適正な運用、たとえば国民健康保険や社会保険が適正に運用されているかどうかのチェックです。四番目が健康の増進。これは、県医師会と郡市区医師会とでは若干違うのですが、郡市区医師会の活動を例に挙げると、各地域単位で行われている住民健診とか、老人会や学校、職場単位の健康診断、保育所や保健所などでの予防接種、医療相談といった仕事があります。



にあたります。そのほか、医療に関する委員会がたくさんあって、委員会に所属しているような活動をしています。

## 女性医師が、医師会を 変革しつつある

上坂●最近では、私の周りでも女性の医師が増えていることを耳にします。女性会員もたくさんいらっしゃるんでしょうか？

小森●そうですね。現在、県医師会ではおよそ13%が女性会員、つまり女医さんです。数字的には少ないと思われるかもしれませんが、年々増えておりまして今年は初めて女性の理事も誕生しました。日本全体ではもっと顕著で、平成19年の医師国家試験の合格者のほぼ三人

に一人が女性ですし、たとえば大学によっては女性の卒業生が多いところもあるように、全国的な傾向になってきています。

上坂 ●お医者様の世界でも女性の進出、活躍が著しいわけですね。私の周りでも女医さんが増えるのは歓迎ですが、会長はいかがですか？

小森 ●私も大歓迎です。個人的には、女性医師の比率が将来的に50%くらいになることが理想だと思っています。女性の感性は医師という職業に非常に適しているとは考えています。たとえば、患者さんに優しく接する、その人の気持ちになつてあげられる、世の中の嫌な事に対しても、清潔感といいますか、われわれ男性とは異なる正義感をもつておられるように感じます。もちろん男性医師のいいところもいっぱいあるんですが、何より患者さんにそつと寄り添ってあげられるというのは女性ならではの感性で、医学が進歩すればするほど、私はそういう要素が大切になってくると思っています。

上坂 ●全国的に医師不足、看護師不足が言われていますが、女性医師が増えることで、問題の改善に少しでもつながるといいますよね。



小森 ●いいご指摘です。実は、私が医師会長に就任するにあたって掲げた公約の二つが、女性医師の問題です。つまり、医師不足を改善する手段の一つは、女性医師の就労環境を改善することだと、そのために県医師会では「女性部会」を設けて、初めて女性理事を迎えました。その理事を中心に「女性医師検討委員会」という組織を立ち上げて、女医さんが抱えている問題について中間答申をもらったんです。その中で出てきたのが女性医師の「ドクターバンク」でした。

## 女医さんのための

### 職場復帰プログラムを支援

上坂 ●ドクターバンクというのは聞き慣れない言葉ですが、どういうものなんですか？

小森 ●わかりやすくいえば、医師の無料就職紹介事業です。求人、求職を医師会が仲介してお世話する。ドクターバンクに登録していただき、求職があれば無料で紹介するわけですが、その女性医師版ですね。その登録者の中に医師免

今こそ女性医師の  
力が必要です

許を持ちながら現在、医療活動を行っていない。潜在的な女性医師“がけっこ”というラッシャツて、その人たちが職場復帰、もしくは医師として再スタートするため条件、要望がいろいろあがってきているんです。

上坂 ● 私たち女性からするとなんとももったいないというか、せっかく免許があるのになぜ生かせないんだろうと思ってしまうが…

小森 ● そうなんです。ですから私たち医師会としても、そのバックアップをなんとかしたいというのが本音なんです。たとえば女性が結婚して子どもができて、どうしても家事や育児が中心になります。それは女医さんと同じです。だから、女性ドクターバンクへの要望も「午前中だけ働きたい」「朝食をつくって子どもを送り出し、夕方保育園に迎えに行くまでの間、勤務したい」「子どもが病気になったら仕事を休める」とか、そういう条件が整った病院で働きたいという声が多い。それと、急な病気のため、保育園・幼稚園に通うことのできないお子さんのための「病児保育」の数が少ないのも問題で、医師会がそういう保育園

を持つことはできないものかと考えています。

上坂 ● とても現実的で、切実な要望ですよ。最近是一般企業でも、女性の再雇用や在宅勤務などが増えてきていますが、病院や医療機関はどうなのでしょう。

小森 ● 勤務医の場合、数年前までなかなかそういう女性医師を再雇用する病院は少なかったのですが、いまは医師不足が深刻になりつつありますからそんなことは言ってもらえない時代です。条件をクリアするために医療機関でもさま

ざまな工夫が試みられています。たとえば、女性医師のための職場復帰のプログラムもそうです。一旦、医療の現場を離れると、職場復帰や復職しようにも、医学の進歩、変化についていけないんじゃないかと不安をもつ女医さんも多いんです。

そういう人たちのためのトレーニングや研修を実践し、再び現場で働いてもらうシステムが盛んに導入、検討されています。私たち医師会でも、そうした職場復帰のプログラムを今後、積極的に支援していきたいと考えています。

**女性が職場復帰できる  
環境づくりって  
素敵ですね**



## 医師の仕事には「夢」がある

上坂 ● 先ほど、医師会会長に就任した際の公約というお話がありました。会長としてそのほかにどのようなことに取り組みたいとお考えですか？

小森 ● 女性医師の問題と並んで、もう一つの柱に考えているのが、勤務医の会員をもっと増やしたいということです。それも45歳以下の医師にたくさん会員になっていただいて、いろんな意見を医療現場に反映していきたいと思っています。医師会というと、開業医の団体のように思われるかもしれませんが、実は勤務医と開業医の会員が半々で成り立っています。私はそもそも勤務医の改善なくして医療界の改革はできないと考えています。先ほどもいいましたが、医師は国家試験に合格して最低10年ぐらひは「勤務医」として経験を積むのが一般的です。つまり、開業医といつても勤務医を経て開業するケースが大半なんです。そういう意味では勤務医時代に、いかにして医師会の活動や医療に対して関心をもってもらうかが、医師会全体ひいては医療界全体を底上げする要因になると考



PROFILE  
小森 貴

こもり・たかし ● 小森耳鼻咽喉科医院・院長。昭和27年4月、金沢生まれ。金沢大学医学部卒。1977年(昭和54年)、金大病院耳鼻咽喉科勤務、県立中央病院耳鼻咽喉科医長を経て、平成元年に開業。この間、輪島・舳倉島の診療所に25年間通い続けるなど地域医療にも心血を注ぐ。日本医師会代議員、県医師会長のほか、県学校保健会長、県医療在宅ケア事業団理事長、県医師国民健康保険組合理事長など公職多数。

えるからです。

上坂 ● 要するに、勤務医の皆様にもっと会員になっていただくには、今のような多忙な勤務環境ではなかなか医師会の活動にまで目が向きにくいかもしれないので、それをなんとか改善していきたいということですね？

小森 ● そういうことです。私は、医師の仕事には「夢」があると思っています。たとえば、最先端の研究、論文で世界の学

会をリードする、新薬や新しい治療法を開発する、24時間患者さんを断らない開業医をめざす、保健所や厚生労働省に勤務して結核や感染症を撲滅したい、地域の老人、地域の医療を支えたい、あるいは専門医のトップランナーになるというように、いろんな可能性があります。勤務医として一定の経験を積んで、ようやく自分の進むべき方向が見えたとき、この仕事に誇りが持てるようになってい

**勤務医の改善なくして  
医療界の改革はできない。**

| SPECIAL INTERVIEW |



てほしいと願っています。それにはやはり、医師会の組織には今何が必要で、何が足りないかを含めて若手や中堅の医師の皆さんの意見がしっかり反映される受け皿としての組織ができてないといけな  
いと考えています。

### 「健康を語ろう会」で 医師が寸劇を上演

上坂●医師不足という問題については、都市部の限られた病院に医師が集中しているような印象があります。会長はどのようなお考えですか？

小森●私自身、医師の絶対数が足りないと思っています。それに加えて、大学病院や拠点病院の勤務医の負担が大きすぎるものが地域の医師不足を招く要因になっている面が少なくありません。それを改善していくために現在「勤務医基本問題検討委員会」を立ち上げました。地元の開業医や医療機関との間でワークショップを行い、少しでも勤務医の負担を減らしたいと考えています。開業医側が往診や在宅医療をより積極的に担う、地域の保健指導をする、さ

らには急患をしっかりと診るといいうように、開業医との間でそうした連携が進めばかなり改善できると思います。実際に県立中央病院の小児科は、地域の開業医が診察を行っていますよ。

上坂●医療の地域連携については、ほかにいろいろな対策をとられているんですか？

小森●医師同士や病院間の連携、ネットワークはもちろんですが、一方で、地域医療について県民や地域の皆さんと私たち医療関連職種の間が集まって「健康を語ろう会」という、気さくな意見交換の場を年一回設けて、自由に楽しく語りあっています。ここでは、医師、歯科医師、看護師、薬剤師など医療の仲間が、医療についての寸劇を企画から脚本、演じて、参加者の皆さんと大いに笑って交流を深めています。「健康を語る会」というと、壇上にパネリストが椅子に座って高いところからお客様を見下ろす姿をイメージしがちですが、私たちはすり鉢型の会場で、逆に観客が医師を見下ろし、意見交換についても医師は極力口を出さず、医療に対する不満や課題をただひたすら聞いて、答えを求められたことについてのみ答える形式で行っています。



## 「混合診療」の併用で何が、 どう変わるのか

上坂 ●面白いお話ですね。お医者様が企画、脚本、出演、演出なさる寸劇はぜひ見てみたいところですが、地元の人たちとの交流の狙いはどんなところにあるんですか？

小森 ●私たちは、日本の医療制度を決

めて、選ぶのは最終的には県民であり、国民だと思っています。そのためには医療費や保険制度や医療そのものもがもと国民、県民にオープンであるべきだと考えますし、必要であれば公開して皆さんを選んでいただくような、そんな仕組みになつていくべきだと思います。そうした考えに基づいて、私自身の公約としてももう一つ「医療制度モニター」の募集も始めています。

上坂 ●医療業界では、自由診療と保険診療を併用した「混合診療」を導入する動きもあるとかがつております。混合診療になると、私たちにどのような影響があるのかということも含めて、最後に会長のお考えをお聞かせいただけますか？

小森 ●「混合診療」というのは、平たく言うと保険がきかない自由診療と、保険がきく診療を併用するということです。日本の医療制度では現在、併用は原則として禁止されていますが、自由診療の中には、高度な先進医療もあれば、美容整形手術のようなものもあります。自由診療だから医療費は高いし、だからいけないというつもりはありませんが、

混合診療が導入され、それがあたりまえになつていくと、自由診療で高額な医療費を払える所得層と、保険でしか治療を受けられない人との“格差”が生じてきます。それに保険がきかないことで、どういう治療が行われているかという国のチェック、監査もきかなくなる可能性があります。命はなによりも大切なものです。豊かな方と生活の苦しい方の命が差別されるようなことは、絶対に許すことはできません。新しい医療技術

や薬品、機材はすみやかに科学的にその効果を検証して、保険診療で使用できるようにすべきであり、安易に混合診療を導入すべきではありません。我が国の医療制度は、だれでも、どこでも、公平に、最善の医療が受けられるという世界に誇るべき制度です。大切な命と健康を守る医療は、公正であること、社会的正義が守られていることが重要なことです。そういう意味も含めて、日本の医療を守っていくのは「国民」だと思います。決めるのは国民であり、県民の皆さんです。そのために、私たち医師会が何をしていくか。今まさにそれが問われていると思いますね。

私は、人の放つオーラには二種類あると思っています。人をはね除ける強いオーラと、人を包み込む優しいオーラ。小森会長に感じたオーラはもちろん後者。"何でも聞いていいよ。伝えたいことはいっぱいあるんだ"と、お会いした瞬間から「小森ワールド」に引き込まれていました。とくに「女性の感性が医師に向いている」という話や、ドクターによるお芝居の話が興味深かったですね。ともすると医師と患者の間に、勝手に上下関係をつけてしまいがちですが、そこには格差もバリアーもあつてはいけないのだと改めて痛感しました。ただ一つ心残りなのは…会長はお芝居でどんな役をなさるのでしょう？ 大事な事を聞き忘れました！



### PROFILE

#### 上坂典子

うえさか・のりこ ●フリーアナウンサー。石川県小松市出身。平成10年4月、北陸放送(MRO)を退社してフリーとなる。現在、北陸放送テレビの「ホウク」(毎週土曜17:30~18:00)のメインキャスターを務めるほか、MROラジオ、えふえむ・エヌ・ワンなど、テレビ・ラジオの仕事を中心に、式典・イベントの司会、ナレーターとして活動中。